

「義歯(入れ歯)」の歴史について

人工の歯の歴史をたどると古くはエジプトにその記録があります。吸着に頼った床(※)タイプの義歯に限って言えば、1839年、アメリカ人チャールズ・グッドイヤーの加硫ゴム(弾性や強度確保するため硫黄を加えて作られたゴム)が開発されてから始まり、その後金属や合成樹脂へと材料の改良が行われてきました。

ところが、日本では16世紀にはこの床タイプの義歯が実用に供されていたのです。

現存する最古の義歯は、和歌山市願成寺の尼僧、仏姫(1538年没)の木床一本造りの上顎総義歯です。かなりの高額で、上下あわせて1両3分(現在の50万円位)という記録が残っています。滝沢馬琴や平賀源内なども木の入れ歯を持っていたようです。

発見当時は最古といわれた柳生宗冬(1637年没 剣豪柳生十兵衛の弟)の上下総義歯も有名ですし、徳川家康の義歯も歴史書に記載があります。

このように、使用者の知られていないものだけで、十数個あり、使用者不明のものも含めると200個くらい現存しています。

これらのことから、義歯に関しては、日本は欧米に先駆けること300年というところだったわけです。

当時、義歯の床には、きめが細かい抗菌性もある性質から「つげ」の木が用いられ、歯の材料には、石材の蠟石(蠟のような色をしたやわらかい石)、鯨のひげ、水牛の角、象牙、人の歯が前歯に使われ、奥歯には、釘が打ち付けられていました。義歯の製作は、「入れ歯師」といわれる専門家が古い、一般医学を修め、口腔(歯、あご、口の中などの)疾患、咽喉(のど)の疾患を扱い、抜歯なども行っていた「口中医」とは区別されてきました。「入れ歯師」は「口中医」にかかれぬ庶民に親しまれましたが高額な入れ歯がどの程度普及していたかは不明です。

余談ですが、先の柳生宗冬の義歯は奥歯にも蠟石が使われ、すり減らないことから、物を噛むためでは

なく変装用に使われたと考えられています。「柳生と伊賀は近い存在で柳生の一族も忍者としての修練をさせられていたのでは？」という伝説です。

このように世界に誇る歴史ある日本の義歯ですが、できるなら終生入れ歯のお世話にならずに自分の歯で過ごしたいものです。

※入れ歯の歯が植えてある基部のことを床(しょう)と呼んでいます。今の総入れ歯で言うと、歯肉を模した赤い色をした部分です。

11月は児童虐待防止推進月間です
～気づくのはあなたと地域の心の目～

児童虐待問題は社会全体で解決すべき重要な課題であり、国民全体で理解を深めていくことが不可欠です。

「虐待を受けたと思われる子ども」を見つけた時やご自身が出産や子育てで悩んだときには、健康福祉課または児童相談所へご連絡ください。

○児童相談所全国共通ダイヤル

☎0570-064-000

○厚生労働省(児童虐待防止対策について)

HP <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv.html>

問合せ 健康福祉課 ☎029-240-6550

広告